

巻頭言

副会長 佐藤 文保

以前つけていた日記帳が目にとまり、手に取って開いてみました。毎日たくさんは書けないと思い、1ページが5つに区切られた5年日記を購入し、頑張って書いていたことを思い出します。その日記帳を読み返して見ると、数行であっても、そのころの記憶が鮮明によみがえってきます。時が経過したことを実感するとともに、環境の変化もみえてきます。自分ながら『成長したなあ』とを感じる場面も出てきます。

みなさんは福岡に福岡失語症研究会という会があったことをご存じでしょうか？私がSTになった頃は、まだ、医療や福祉、さらには教育の現場で働くSTの数は少なく、STという職種は決して認知度が高いとはいえませんでした。周囲からも「STって何をしているの」といわれることも少なくはありませんでした。今は『言語聴覚士』という名称で呼ばれていますが、そのころは『言語療法士』や『言語訓練士』、ときには『言語の先生』という名称で呼ばれていた記憶があります。そうした中、STの質を高めるとともに、STの地位の向上や相互の親睦をはかることを目的として、この会は活動していました。その後、STが国家資格化された年に、新たな組織を発足させることとなり、現在の福岡県言語聴覚士会（以下、県士会）が誕生し、その役割を県士会に委ねることとなりました。ちょうどその頃、私も会の運営に携わっていたこともあり、日記にもその変革の時期ので出来事について書き留めていました。

それから10年。何が変わったのでしょうか？一番変わったことと言えば、STの数でしょうか？県士会立ち上げのための準備会に直接集まったのは、わずか28名だった記憶があります。そして、今は会員数500名に迫るまでになりました。また県士会が主催する勉強会も充実し、各ブロックの活動も盛んに行われるようになりました。その他にも、多くの病院や施設、あるいは教育現場などで働くSTの数が増加したことで、STの認知度も以前と比べると格段に高まったように思います。とはいえ、未だに「PT・OTは分かるけど、STって何をしているの？」とDrに言われる施設もあるそうです。同じ医療職の職員からこのように言われることを考えると、まだまだ世間の認知度の低さを予想せざるをえません。

今年、日本言語聴覚士協会が法人化されたことで、今後STとしての認知度は徐々に高まってはくるものと思います。しかし、各施設においては、一人一人のSTが自らの役割をアピールしていかなければ、その認知度は高まらないでしょう。また、県士会としては、社会や行政にSTの存在や役割をさらにアピールしていくことが必要となってくるでしょう。

来年、県士会は10周年を迎えます。これまでの10年間を振り返りながら、残された課題を再認識し、新たな発展や成長につながる活動を始める、節目の年になればと思います。

来年から、また日記を付けることにしました。10年後いろいろな意味で『成長したなあ』と感じられるかが楽しみです。